

【研究ノート】

龍興寺窖藏出土背屏式造像について

小澤 正人

はじめに

山東省青州市龍興寺窖藏遺跡では南北朝時代から宋代に到る大量の仏像が出土している。その中心は南北朝時代の北魏後期から北齊にかけての造像であり、山東地域における当該時期の仏教美術を考える上での重要な資料となっている。

龍興寺窖藏における南北朝時代造像のなかには、大きな光背に如来像と脇侍の菩薩を配した一光三尊型式のものがみられる。この形式の造像は一般に「背屏式」と呼ばれており、本稿でもこの呼称に従うことにする。龍興寺窖藏の南北朝時代造像は、北魏から東魏にかけてはこの背屏式が主であり、北齊になると単独像が中心となる。

背屏式造像の編年については、発掘をおこない、出土造像の整理にあたっている青州市博物館の夏名采・王瑞霞によってまとめられたものが最も早い¹⁾。その後、青州市博物館が編者となる図録が数種発行され、具体的な年代を明記した作例が紹介されている。青州市博物館によるこれらの論文・図録では、実年代の表記に若干の違いはあるものの、基本的な編年には変更がなく、青州市博物館により背屏式造像についての基本的な編年体系は確立されたといえる。

その反面、正式報告が未刊行ということや、公表された論文や図録が分散しているため、背屏式造像の全体像がわかりづらくなっていることは否めない。そこで本稿では、これまでの研究成果に若干の私見を加えて、北魏から東魏の龍興寺窖藏出土の背屏式造像について、概観を試みてみたいと考えている。

なお龍興寺窖蔵出土の背屏式造像は、高さが60センチメートル前後で台状のもの、高さが1メートルを超え、臍で台座に立てられるタイプのものがあるが、本稿では後者のみを扱うこととする。

まずこれまで龍興寺出土の背屏式造像がどうとらえられてきたかを見てみたい。

1 これまでの研究

龍興寺窖蔵出土の背屏式造像研究としては、まず上記の夏名采・王瑞霞によるものを挙げる事ができる²⁾。両氏は背屏式造像を4期に分けているが、このうち第1期から第3期が北魏・東魏に該当する。実年代としては、第1期が北魏後期で、500年から530年の間、第2期は北魏末年から東魏初年で、北魏永安年間から東魏天平年間ごろ、そして第3期は東魏初年から東魏末年で、534年から550年頃としている。それぞれの時期の背屏式造像はさらに型式分類され、第2期は2型式に、第3期は4型式に細分されている。このうち第3期については、細分された4型式は、年代差を表すと考えられている。その後王瑞霞は2002年に背屏式造像を含んだ龍興寺造像全体についての編年案を発表しているが、内容はほぼ同じである³⁾。

各時期に属す作例については、上記論文で代表例が取り上げられているほか、1999年に中国歴史博物館(当時)でおこなわれた展覧会、その後の2000年の龍興寺窖蔵出土造像の図録、2001年の香港に於ける展覧会の図録、2002年の北京中国世紀壇における展覧会の図録で、年代を表記して紹介されている⁴⁾。第1表は本稿で取り上げる背屏式造像の各図録での年代表記と、先の夏・王による分期をまとめたものである⁵⁾。

これら作例の相対的な前後関係については、基本的に違いはない。ただし実年代の表記については、従来北魏から東魏とされていた造像が、2002年展覧会図録の分期では東魏と一括されている点が目を引く。この図録が最新のものであることから、本稿の時期区分はこの表記に従うこととする。

次に背屏式造像の各時期ごとの特徴について、これまで発表された研究・図録をもとにまとめてると、以下の様になる。

作例	本稿での年代表記	夏・王(2000)の分期	精品(1999)		芸術(1999)		香港(2001)		北朝(2002)		紀年銘
			頁番号	時代	図番号	時代	NO	時代	頁番号	時代	
B73号	北魏	第1期1型	-	-	10	北魏	-	-	57	北魏後期	
B40号	北魏	第2期1型	47	北魏	11	北魏	1	北魏	31	北魏後期	
B416号	北魏	第2期2型	73	北魏	14	北魏	2	北魏	33	北魏後期	
B21号	北魏	第2期2型	-	-	9	北魏	13	北魏	41	北魏	太昌元年 532
B163号	東魏	第3期1型	65	北魏	-	-	3	北魏 東魏	-	-	
北朝105頁	東魏		-	-	-	-	-	-	105	東魏	
B76号	東魏		63	北魏 東魏	19	北魏 東魏	5	北魏 東魏	62	東魏	
B7号	東魏	第3期3型	59	東魏	37	東魏	10	東魏	88	東魏	
B70号	東魏	第3期2型	71	東魏	33	東魏	7	東魏	71	東魏	天平3年 536
芸術図24	東魏		61	東魏	24	北魏 東魏	12	東魏	83	東魏	
芸術図17	東魏		67	北魏 東魏	17	北魏 東魏	6	北魏 東魏	-	-	
B384号	東魏		-	-	18	北魏 東魏	-	-	-	-	
B164号	東魏	第3期3型	57	東魏	35	東魏	11	東魏	79	東魏	
B190号	東魏		69	東魏	41	東魏 北齊	8	東魏	73	東魏	

第1表 龍興寺出土背屏式造像の作例と出典

分期：夏名采・王瑞霞 2000 精品：歴史博物館他 1999 芸術：青州市博物館 1999 香港：香港芸術館 2001 北朝：中国世紀壇芸術館 2002

(1) 如来像

北魏後期の如来像は身長が低く、全体的な身体の比率が不自然である。頭部は肉髻が高く、髪は波状とするか、あるいは表現されない。顔の輪郭は方形で、わずかに笑みをたたえる。褒衣博帶着衣を厚くまとい、身体の輪郭は覗えず、

裾は大きく広がり、着衣の襷は突出している。ただし北魏後期でも時期が降ると、身長が高くなる、着衣が薄くなる、裾の広がりが小さくなる、襷は二重刻線で表現する、といった変化が生じてくる。

東魏時代にはこの変化が更に進み、身長が高くなり、身体の比率も改善する。頭部では肉髻が低くなる傾向があり、頭髪は螺髪が中心となる。顔は丸みを帯び、杏仁形の眼は細く長く、鼻はやや広がっている。褒衣博带式の着衣をまとおうが、厚みがなくなり、裾の広がりも弱くなる。

(2) 菩薩像

北魏後期では、如来像同様に身体の比率が不自然である。頭部は束髪で、頸部に簡単な胸飾をつける他は、上半身は半裸である。肩から天衣をつけ、身体の正面で交差させる。交差する場所は膝と腰があるが、腰で交差する場合は玉環を通してある。下半身は襷が密集した裙をつけ、手には持物を持つ。

東魏になると身体の比率が自然となり、全体に豊かになる。頭部には宝冠を着ける例が増える。肩に円形状の飾りをつけるようになる。上半身は半裸のものと、僧祇支をつける例がある。天衣は幅が細くなり、瓔珞をつける例もある。下半身の裙は北魏後期と同じである。

(3) 光背

北魏時代では頭光・身光を浮彫・線刻・彩色で表現する。外周には飛天・龍・化仏・宝瓶などを彫る。下部には蓮華を彫るほか、龍の頭を彫る例もある。東魏時代になると、外周には宝塔・伎楽天などが彫られる。下部には龍の全身が彫られる。

以上をまとめるならば、青州市博物館では、如来像は北魏後期の秀骨清像が、東魏になると全体に丸みを帯びるようになり、菩薩・光背は装飾性が増す、といった認識をもっているようである。

次に、出土した背屏式造像を北魏後期、東魏に分けて、それぞれの時期ごとに作例を見てみたい。

2 背屏式造像の作例

ここでは時代ごとに作例をみてゆく。龍興寺窖藏出土造像の遺物番号については、正式報告がなされていないこともあり、一部しか公表されていない。そこで本稿では暫定的な措置として、以下のような方針を採る。

報告文などで資料番号が判明している造像についてはこれを用いる。資料番号は「B～」といった形式をとっているため、本稿では「龍興寺B～号造像」(略して「B～号造像」)と表記する。

資料番号がわからない造像については、各図録の略号と図版番号及び頁番号を用いて表記する。基本的には最も掲載数が多い『青州龍興寺佛教造像芸術』の図番号を優先し、『青州龍興寺佛教造像芸術』に掲載されていない造像は、他の図録で補う。各図録の略称は以下の通りである。

『青州龍興寺佛教造像芸術』: 芸術

『青州北朝佛教造像』: 北朝

(1) 北魏後期

龍興寺B73号造像(第1図1 第5図1 第8図1) 上部及び左半分を大きく欠損している。残高60.5センチメートルを計る。背面には題記があり「造釋迦」とある。中尊は頭部を破損している。漢民族式の着衣を付け、胸元からは僧祇支・結紐がのぞく。結紐は結び目を横方向として、輪を左側に向け、紐の先端を右側に垂らす。袈裟の襞は中央よりやや右側でU字状となる。襞はその間隔が広く、彫りが深いことから、段状に見える。袈裟の先端は左手前腕部にかかる。手は与願印と施無畏印を結ぶ。身光は五重になっている。蓮台には何も彫刻されない。

菩薩は右側のみが残るが、これも頭部を破損する。上半身には鈴を垂らした胸飾りをつける。天衣は肩から上腕を覆った後、膝下付近で交差し、前腕にかかり、更に垂下し、大きく外側に広がる。右手には蓮華の蕾をもつ。左手には天衣を握る。裙の腰紐は足下まで垂れ下がる。腰紐の先端には房が付いている。頭光は同心円状に浮き彫りされる。蓮台は複蓮弁が彫られている。中尊の蓮台との間に茎などはみられず、独立していたようである。

光背には火炎文を浅く浮き彫りにする。

龍興寺B40号造像（第1図2 第5図2 第8図2・3）残高95.5または113センチメートルを計る。中尊は漢民族式着衣をまとう。頭部は肉髻を高く作り、頭髪を渦巻き状に表現している。顔面は丸く、頬骨の盛り上がりは弱く、細めで切れ長の杏仁形の眼はわずかにつり上がる。手は施無畏印・与願印を結ぶ。漢民族式の着衣は胸元を広く開け、僧祇支と結紐がのぞく。袈裟の先端は前腕にかけてかかったのち垂下する。結紐は胸の高い位置にあり、結び目は横方向である。袈裟の襞はやや右側に寄ったところでU字状となる。太めの二重刻線で表現されている。刻線はV字状に刻まれており、そのため刻線に囲まれた部分は断面が台形或いは三角形になっており、襞が立体的に見えるような表現がとられている。頭光の円は浅く浮き彫りされ、中央には幅広の単蓮弁の蓮華が彫られており、先端がやや反り返る。蓮台には彫刻がない。

脇侍は左右同型である。主尊と同様に丸い顔で、頬骨の盛り上がりや眼の特徴も共通する。頭部は高めの髻をつけ、装飾のない宝冠をかぶり、やはり装飾のない冠帯を付ける。主尊側の手にはハート型の持物を、反対側の手には蓮の蕾を持つ。天衣は肩から上腕部を覆い、脚部の中程で交差し、前腕で受けた後、先端は足下まで伸び、幅が広がり、左右に広がる。上半身は胸飾りのみをつける。裙は腰紐でとめられ、上端は腰紐より上に出る。腰紐は横結びで紐は左右に垂れる。頭光は中尊と同じ。蓮台も中尊と同じく彫刻がない。中尊の蓮台とは1本の茎で結ばれている。

光背は上端を欠く。周辺には浅い刻線で飛天を刻む。

龍興寺B416号造像（第1図3 第5図3 第8図4・5）高さ140センチメートルを計る。中尊は漢民族式着衣をまとう。頭部は肉髻を高く作り、頭髪を渦巻き状に表現している。顔は上下に長い楕円形で頬骨はほとんど目立たない。やや下ぶくれ気味である。杏仁形の眼は細め、切れ長で、わずかにつり上がる。漢民族式の着衣は胸元を広く開け、僧祇支と結紐がのぞく。結紐の結び目は横方向で右側に結び目の輪があり、左側は袈裟の下に隠れる。袈裟の先は左手の前腕部にかかったのち垂下する。袈裟の襞はやや右側に寄ったところでU字状となる。襞の彫刻法は先のB40号造像と同じだが、彫りがやや浅い。頭光の円は浅く浮き彫りされ、最も外側には唐草文がやはり浅く浮き彫りされる。中央にはB40号造像に比べ上半が細い単蓮弁の蓮華が彫られ、先端がやや反り返る。蓮台には彫刻が確認できない。

菩薩はそれぞれ一部ずつが破損しており厳密な比較は難しいが、ほぼ同型と考えられる。顔は主尊と同じ楕円形だが、やや角張っている。鬘を高く結び、三山冠をつける。三山冠は冠帯でとめられ、冠帯からは冠繪が垂下する。また垂髪が肩に懸かり、外へと流れる。三山冠には半円形の宝珠が見られる。上半身には着衣をつけないが、肩飾と胸飾がある。肩飾は円盤状で、数本の飾り布が垂下し、肩から上腕部を覆う。胸飾は三葉形の垂飾が付けられる。天衣は膝下で幅広に交差し、前腕にかかり垂下し、足下に及ぶ。先端はあまり外反しない。手先を確認できた右脇侍では、右手は蓮華の蕾をもち、左手には水瓶を下げる。裙は腰紐でとめられ、上端は腰紐より上に出る。頭光は浅く線刻されるのみである。蓮台には蓮弁が浅く彫刻され、中尊の蓮台につく龍頭から出た1本の蓮華の茎で結ばれている。

光背には先端に垂下する龍が、周辺には飛天が高浮き彫りされる。飛天の頭部は菩薩に似て、裙や天衣で足先を隠している。

龍興寺B21号造像（第1図4 第5図4 第8図6・7）

下半分を欠損している。残高は51センチメートルを計る。背面に銘文があり、比丘尼恵照が皇帝・父母・姉妹のために弥勒一区を作り、西方無量寿国への託生を願っている。銘文には太昌元年（532年）の年号があり、北魏末の造像であることがわかる。

中尊は頭部と脚部下半を欠損している。剥離痕から見ると頭部は上下方向に長い楕円形のものである。着衣は漢民族式で、胸元からは僧祇支・結紐がのぞく。結紐の結び目は横方向で右側は折れ曲がって袈裟の中に入り、左側は紐の先端は二本となり、袈裟の上にかかる。結び目の輪は右側にあると考えられる。袈裟の襞はやや右側に寄ったところでU字状となる。襞は上部をほぼ垂直に、下部を緩やかにする断面V字の刻線で表されている。袈裟は左手前腕にかかった後に垂下する。与願印と施無畏印を結んでいる。頭光の円は五重に浮き彫りされ、最も外側には唐草文が彫られている。頭光中央には小さめの蓮華が彫られている。また身光は多重に浮き彫りされている。

菩薩も鬘と下半を欠損している。頭部ははっきりしないが、冠帯と冠繪らしきものが確認できる。持物に違いはあるが、ほぼ同型と考えら得る。頭部はやや細めの杏仁形の眼で、頬骨がやや張っている。上半身には胸飾りを付けている。天衣は幅広く肩部から上腕部を覆った後、腰部で環を通り交差し、その後

前腕部にかかり垂下する。二体とも外側の手に蓮華の蕾をもつ。中尊側の手には左菩薩はハート型の持物を、右菩薩は水瓶をもつ。裙は腰紐で縛られている。頭光は浅い浮き彫りである。

光背は上端に垂下する龍とその上に蓮華に座る如来像を高浮き彫りにする。周辺にはやはり高浮き彫刻の飛天が見られる。飛天はいずれも鬚を高く結び、足先は表現されていない。また全面に火炎などを線刻している。

3 東魏時代の作例

龍興寺B163号造像(第2図1 第5図5 第9図1・2) この像は上半部を欠損するほか、主尊・菩薩も一部を欠いている。残高110センチメートルを測る。主尊は肉髻を欠損している。頭部は螺髪である。顔はやや四角く、頬骨が張る。杏仁形の眼は細めである。漢民族式の着衣をまとい、胸元は大きく開いている。胸元からは僧祇支・結紐がのぞいている。結紐の結び目は横方向で、先端は袈裟に隠れている。袈裟の襞は二重線で表され、その間隔は寛い。袈裟は身体の右側でU字状になった後、左で前腕に懸かり、垂下する。光背は同心円を浮き彫りで表し、中央には二重の蓮弁を彫る。外側の蓮弁は角張り平面的であり、内側はやや幅が寛く、先端が反っている。同心円の再外周は幅が広がっている。身光も同様の浮き彫りである。蓮台には彫刻は見られない。

菩薩のうち右菩薩の頭部を欠いているが、ほぼ同型と考えられる。頭部には冠を付けているようであるが、形状は不明。冠帯には花びら状の飾りが付けられ、リボン状に結んだ冠繪がつき、垂下する。蕨手状の垂髪が肩に懸かる。顔は主尊に似て頬が張っている、杏仁形で細めの眼をしている。上半身には着衣をまとわず、肩飾・胸飾のみがつく。胸飾には宝石らしき垂飾がつくが、左右で形状が異なる。肩飾は円盤状で、布状の飾りが垂下する。肩部から天衣と瓔珞をつけ、腰部で交差させたのち、腕にかけさらに垂下させている。瓔珞の交差部分は中央が突起した環で結ばれている。左菩薩は左手に蓮華の蕾をもつ。右手の持物は破損しているため不明である。裙は腰紐で縛られ、裙の上端は紐の上に出ている。頭光は中央に幅広で先端が外反する蓮弁が浅い浮き彫りにされている。蓮台にも蓮弁が彫られている。

光背は上部を破損しており、わずかに左側に高浮き彫りの伎楽天1体を残すのみである。この伎楽天は頭部に宝冠を着け、細身で、足先を露出していない。

下部では中尊に沿うように小型の龍の全身像が高浮き彫りにされている，龍は口から蓮華を吐き，それが分岐して葉や蓮台になっている。菩薩はこの蓮台上に立つ。

北朝 105 頁造像（第 2 図 2 第 5 図 6 第 9 図 3・4）下部の一部を欠損するが基本的には完存する。高さ 110 センチメートルを計る。頭部は肉髻が高く，螺髪である。顔は丸く，杏仁形で細めの眼はつり上がり気味である。漢民族式の着衣をまとい，大きく開いた胸元からは僧祇支・結紐がのぞく。結紐の結び目は横方向で，袈裟の下に隠れている。袈裟の襞は二重の刻線で表現されるが，彫りが浅いため，あまり突出しているようには見えない。袈裟はほぼ中央で U 字状となったのち，先端は左手前腕にかかる。蓮台には彫刻はみられない。

菩薩のうち左側の菩薩の顔は主尊に似るが，眼はより細い。高めの髻をつけ，装飾のない宝冠をかぶり，冠帯からは冠繪が垂下する。円形で布飾りが付く肩飾と胸飾が付く。天衣は肩からそのまま垂下してから腕に懸かる。上半身に着衣はない。裙と縛る腰紐の先端は，膝付近にまで垂れる。右側の菩薩は頭部の鬘を破損しているが，残存部から見る限り，飾り等は付けられていない。顔は主尊に似る。肩飾りは左側の菩薩と同じ。天衣は肩を覆った後，膝上部まで垂下して交差し，腕に懸かった後，再度垂下するが，あまり外側には広がらない。上半身には僧祇支をまとう。裙は左菩薩と同じ。

光背先端部に塔があり，飛天が支えている。周辺部には伎楽天が見られる。これら塔や飛天はいずれも高浮き彫りである。飛天は全体にふくよかで，鬘がなく，足先が表現されている。中尊の蓮台には全身を彫刻した龍がつき，口から蓮華を吐く。龍の口から出た茎から葉や蓮台が分かれる。菩薩はこの蓮台の上に立っている。

龍興寺 B76 号造像（第 2 図 3 第 6 図 1 第 9 図 5・6）上部と下部の一部を破損している。残高 133 センチメートルを計る。中尊は肉髻が高く，螺髪である。顔は四角く，頬骨が張っている。杏仁形の眼はややつり上がっている。漢民族式の着衣を付けるが，胸元の広がり大きくはない。胸元からは僧祇支・結紐がのぞく。結紐の結び目は横方向で，ほとんど袈裟の中に隠れている。襞は段状になっており，身体のやや右側で U 字状になった後，先端は左腕前腕に懸かり垂下する。頭光は線刻され，中央には幅広で先端がそる蓮弁が彫られ

ている。身光も線刻で表現されている。蓮台には彫刻が施されない。

菩薩は左右同型である。頭部には円筒状の宝冠を付け、冠帯で留める。冠帯からは冠繪が垂下する。また蕨手状の垂髪が肩から上腕にかけて垂れる。顔は中尊に似て、頬が張っている。肩には円形の肩飾がつき、やはり飾りがさがる。上半身には僧祇支を付けるほか、右側の菩薩は胸飾をつける。天衣は肩から垂下した後、膝あたりで交差したのち、腕に懸かり再度垂下する。あまり横には広がらない。裙は紐で結ばれている。紐の結紐は横方向で、紐は足下半にまで垂下する。蓮台には蓮弁が彫られる。

光背の上部は大きく破損しているため不明な部分が多いが、高浮き彫りの飛天があったようである。中尊の蓮台には全身を彫刻した龍がつき、口から蓮華を吐く。龍の口から出た茎から葉や蓮台が分かれる。菩薩はこの蓮台の上に立っている。

龍興寺B7号造像（第2図4 第6図2 第9図7・8）上半を欠損しているが、主尊・菩薩像はほぼ完存している。残高は120.5センチメートルを計る。主尊は肉髻が高く、螺髪である。顔はやや四角いが、頬骨はあまり張らない。眼は杏仁形。漢民族式の着衣を付け、大きく開いた胸元からは僧祇支・結紐がのぞく。結紐は横方向で、先端は袈裟に隠れる。袈裟の襷は間隔が寛く、浅く段状に彫られている。袈裟は身体の右側でU字形になり、肩から腕に懸かった後、垂下する。頭光の中心には幅広の蓮弁を彫る。蓮台には彫刻が見られない。

菩薩は冠や着衣に違いはあるが、ほぼ同型である。いずれも頭部に二つの円飾からなる頭飾を付け、冠帯からは冠繪が垂下するが、左菩薩のほうが装飾的である。肩には円形の肩飾が、胸には胸飾がある。胸元には僧祇支がみられる。肩から上腕にかけて天衣が懸かり、それを瓔珞が覆う。天衣・瓔珞は腰の部分で交差して垂下してから、腕にかかり、再度垂下するが、あまり外側には広がらない。交差した部分では瓔珞に環が付いている。裙は上端が折り返されている。腰紐の結び目はこの折り返しに隠されており、垂下した紐の先端は膝下にまで及ぶ。紐の途中にはリボンの様な結び目が見られる。また腰からは環を付けた垂飾が下がる。頭光は中尊同様に中央が幅広の蓮華を彫る。右菩薩は基本的には左菩薩と同じだが、冠以外でも、裙の折り返しがなく腰紐の結紐が見えること、左手で天衣をつかむことなどが異なっている。

光背は上半部を欠損しており、先端部の形状はわからない。主尊に沿うように龍の全身が彫られ、口から蓮華が吐き出される。蓮華の先端は分かれ、葉や蓮台は彫られる。菩薩はこの蓮台の上に立つ。

龍興寺B70号造像（第3図1 第6図3 第9図1・2）光背の一部と如来・左菩薩頭部を欠損するが、全体像は把握できる。高さ137.7センチメートルを計る。背面に題記があり、邢長振が亡き姉のために釋迦像を造ったとある。この題記には天平3年（536年）の銘があり、造像が東魏初頭であることがわかる。中尊は漢民族式着衣をまとう。胸元からは僧祇支がのぞく。袈裟の襞はやや幅の広い刻線で表現され、身体の右側でU字状になり、先端は左腕の上腕から前腕に懸かった後に垂下する。頭光は同心円を刻線で表現し、中央には幅の狭い蓮華が彫られる。身光もやはり刻線で表現される。蓮台には彫刻はない。

菩薩のうち左側の菩薩は頭部を欠損する。上半身には胸飾を付ける。天衣は肩からそのまま下がり、やや横に広がる。瓔珞は腰部で交差し、交差する部分には中央が突起した環が見られる。左腕は欠損するが、右腕には水瓶を下げる。裙は前であわせ、襞は膝を中心とする同心円で表現される。裙を縛る紐はみられない。頭光は同心円を刻線で表し、中央には中尊と同じタイプの蓮弁を彫る。蓮台には蓮弁が彫刻される。右菩薩は脚部の一部を欠損する他は、ほぼ完存している。頭部は高めの髻を結び、円筒状の宝冠を付ける。冠帯からは冠繪が垂下する。顔はやや四角く、頬骨がやや張っている。杏仁形の眼は細めで、ややつり上がる。胸には垂飾付きの胸飾をつける。肩からは腰部で交差する天衣と瓔珞をつける。交差部分は左菩薩同様に中央が突起した環がみられる。裙は紐で縛られているが、結び目は天衣に隠されて見えないが、紐は中途に結び目もちながら、垂下している。頭光は左菩薩と同様に同心円を刻線で表し、中央に蓮弁を彫るが、蓮弁の幅が広く、二重になり、先端が反り返るなどが異なる。蓮台には蓮弁が彫刻される

光背は頂部に飛天に支えられた仏塔があり、周辺には伎樂天がみられる。仏塔は正面を向けている。飛天や髻を付けず、やや細身で、足を出している。下部では、如来の蓮台に沿うように龍の全身が彫られ、口からは蓮華が吐き出されている。蓮華の先端は蓮台と複数の葉が分かれており、菩薩はこの蓮台に乗る。

龍興寺芸術図 24 号造像（第 3 図 2 第 6 図 4 第 10 図 3・4）上半部を欠損しているが、主尊・菩薩像はほぼ完存している。残高は 42.6 センチメートルを計る。主尊は肉髻を欠損している。頭部は螺髪で、顔はやや頬骨が張る。杏仁形で切れ長の眼をしている。着衣は漢民族式で、大きく開いた胸元からは僧祇支・結紐が見える。結紐の結び目は横方向で、輪を左側としている。袈裟の襞は断面 V 字の刻線で表現され、間隔は寛い。袈裟は身体の右側で U 字状になり、左上腕から前腕懸かり、垂下する。頭光は浅く段状を呈する同心円で表現され、最も外側の円にはパルメットを充填する。身光も同様の浅い段で表現されている。蓮台には彫刻は施されない。

菩薩は左右とも高い宝冠を着ける点や主尊に似て頬骨がやや張る顔の表情などは類似するが、装飾などは異なっている。左菩薩は植物文と房で飾られた高い宝冠を着ける。冠帯からは冠繪が垂下する。顔は主尊に似てやや頬が張り、杏仁形の眼は細く切れ長である。肩には肩飾を、胸には鈴などの垂飾を付けた胸飾を付ける。肩から天衣と瓔珞を付け、腰の部分で交差させた後、両腕で受け、再び垂下させる。瓔珞は交差部分で中央が突起した環をつける。裙は結び目横方向の紐で縛られ、紐の上にも紐が見える。腰からは環を付けた垂飾を下げる。右手には蓮華の蕾を、左手にはハート状の持物を持っている。蓮台には蓮弁が彫られる。右菩薩は三山冠をつけ、冠帯からは冠繪が垂下する。顔は主尊に似て頬骨が張るが、眼は細くやや伏し目がちである点が異なっている。肩飾・胸飾・瓔珞などはつけていない。天衣は首の部分で身体の前から後ろにかけ、上腕部から再度身体の前に出した後、垂下させる。垂下した天衣は脚部で外側に緩やかにカーブしながら広がっており、動きがある。左手には蓮華の蕾を、右手には水瓶を掲げる。裙は前であわせ、上端を折り返して、さらにその一部を上につり上げ紐で縛る。裙の襞は U 字状で、緩やかに外部に広がっている。蓮弁には彫刻が見られない。

光背は上部を欠損しているために頂部の形状は不明。下部では主尊に沿って龍の全身が彫られている、龍は口から蓮華を吐き、その先はさらに分かれ、葉や蓮台が伸びている。菩薩はこの蓮台に立つ。この他主尊と菩薩の間には蓮華が刻線で表現されている。

龍興寺芸術図 17 号造像（第 3 図 3 第 6 図 5 第 10 図 5・6）頂部と右下部などを欠損するが、ほぼ完存している。高さは 76 センチメートルを計る。中

尊は漢民族式着衣をまとう。頭部は肉髻を高く作り、頭髪を渦巻き状に表現している。顔は上下に長い楕円形で頬骨はほとんど目立たない。杏仁形の眼は細め、切れ長で、わずかにつり上がる。漢民族式の着衣は胸元を広く開け、僧祇支と結紐がのぞく。結紐の結び目は横方向で、先端は袈裟に隠れる。袈裟の襞は細い刻線で表現され、やや右側でU字状となる。先端は上腕から前腕にかかった後に垂下する。蓮台には彫刻は確認されない。

菩薩は左側菩薩が頭部を、右側菩薩が下部を欠損している。左側菩薩は上半身に僧祇支と胸飾りを付ける。肩には円形の肩飾があり、布が垂れている。天衣は膝付近で交差し、腕にかかった後、ほぼ垂直に垂下する。裾は腰紐で縛られる。右側の菩薩は髻と宝冠が欠損しているが、宝冠からは冠繪が垂下する。顔は楕円形で、頬骨などは目立たない。杏仁形の眼は細く、ややつり上がっている。肩飾、胸飾、僧祇支、裾等の表現は左側菩薩と同じ。ただし天衣は肩から垂下した後交差せず、同じ側の腕にかかる点が異なる。

光背先端部に塔があり、飛天が支えている。周辺部には伎楽天が見られる。これら塔や飛天はいずれも高浮き彫りである。飛天は全体にふくよかで、髻がなく、足先が表現されている。中尊の蓮台には全身を彫刻した龍がつき、口から蓮華を吐く。龍の口から出た茎からさらに葉や蓮台が分かれる。菩薩はこの蓮台の上に立っている。

龍興寺B384号造像（第3図4 第6図6 第11図1・2）上半と左菩薩頭部を欠損している。残高45.2センチメートル。中尊は肉髻を欠損しているが、頭髪は螺髪である。顔は丸く頬は張っていない。眼は杏仁形ではあるが細く切れ長である。漢民族風の着衣をつけるが、胸元の開きは小さくなっている。胸元からは僧祇支がのぞむ。袈裟の襞は刻線で表現され、身体の正面でU字形になる。袈裟の先端は左手の前腕のみにかかる。裾の表現から袈裟の下に一枚の内衣を、さらに裾を2枚つけていることがわかる。頭光は同心円を浅い浮き彫りと刻線で表し、外周は唐草文を彫刻する。また中央には幅が広い蓮弁を浮き彫りにする。身光も多重線で表され、最も身体に近い部分には蓮弁が彫られる。

菩薩のうち右菩薩は頭部を欠損する。肩飾と胸飾をつける。肩から下がった天衣は腰の部分で環をくぐりながら交差し、前腕で受けた後、垂下し、先端はやや外に広がる。裾は前であわされており、上端は平らで、腰紐の結紐は線刻

される。右菩薩は宝冠をかぶり、冠帯をつける。冠帯からは冠繪が垂下する。また蕨手状の垂髪が肩までさがる。顔は主尊に似て、眼は杏仁形で切れ長である。肩飾と胸飾をつけ、僧祇支をまとう。天衣は肩から上腕を覆った後垂下し、膝下で交差して、さらに前腕に懸かり、再度垂下する。裙は腰紐で縛られ、その先端は長く垂下する。

光背は上部が破損しているため形状は不明。中尊に沿って龍の全身が彫られている。龍は口から蓮華を吐き、途中で分岐し、先端には葉や蓮台が付く。菩薩はこの蓮台上に立つ。光背全体に蓮が刻線で刻まれている。

龍興寺B 164号造像（第4図1 第7図1 第11図3・4）右菩薩の頭部と光背の一部を破損しているが、全体像はわかる。高さ310センチメートルを計り、背屏式ではもっとも大きな作例である。主尊は高い肉髻をもち、螺髪である。顔は丸みを帯びており、杏仁形の眼をしている。漢民族式の着衣をつけ、広く開いた胸元からは僧祇支・結紐がのぞく。結紐は横方向で、左側に輪がある。袈裟の先端は左手前膊で受けられている。袈裟の襞は表現されていない。頭光や身光は彫刻されていない。蓮台にも彫刻はない。

菩薩のうち右菩薩は頭部と両腕を破損している。右菩薩も両腕を破損しているが、頭部はのこっており、ほぼ全体の像容がわかる。左菩薩は頭部に宝冠をかぶり、冠帯を付ける。冠帯からは短い冠繪がさがる。垂髪が肩にかかる。円盤状の肩飾と胸飾をつける。天衣は肩部からさがり、腰部で交差させ、さらに前腕で受け、再度垂下させるが、あまり外に広がらない。天衣が交差する部分には環があり、環の上にも飾りが見られる。裙を縛る紐などは見えない。右菩薩もほぼ同型ではあるが、腹部で交差する瓔珞がある点が異なっている。瓔珞の交差部分には中央が突出した環がみられる。

光背は頂部に仏塔を彫る。仏塔は角を正面に向け、雲に乗り、飛天が左右を支える。このほか光背上部周辺部には伎楽天が彫られている。これら天人はいずれも髻をつけ、やや細身であるが、足先は表現されている。下部では主尊の蓮台に沿って龍の全身が彫られている。龍は口から蓮華を吐いている。蓮華の先端は葉や蓮台に分かれる。菩薩はこの蓮台に乗っている。

龍興寺B 190号造像（第4図2 第7図2 第11図5・6）本造像はほぼ完存している。高さは126センチメートルを計る。本尊は肉髻が低く、表面にはな

にも彫刻されない。顔はほほがやや張るが、丸みを帯びている。杏仁形の眼は細く、ややつり上がる。漢民族式の着衣をまとい、腹部まで大きく前を開き、僧祇支をのぞかせる。僧祇支は折り返しになっている。袈裟先端は左上手腕から前腕に懸かった後、垂下する。襞は表現されない。頭光は中央に幅が広く、先端が反り返る蓮華を表現する。蓮台には彫刻はない。

菩薩は腕の一部や右菩薩の頭部を欠損するが、全体としては同型である。菩薩は宝冠・冠帯を付け、冠帯からは冠繪が垂下する。垂髪が肩に懸かっている。顔は主尊に似るが、より幅広である。円盤状の肩飾と胸飾をつける。肩飾からは布飾りがさがる。菩薩はいずれも僧祇支をまとう。僧祇支には複雑な折り返しがみられる。肩から垂直に下がった天衣は両腕で受けて再び垂下する。裾は上端を折り返し、それを長めに垂下させ、中間を縛る。

光背は先端部に高浮き彫りの仏塔と飛天を配す。仏塔は角を正面に向け、飛天により支えられる。仏塔下には伎樂天が、また最下部には雲に乗り合掌する飛天が見られる。飛天には鬚がなく、足先と着衣から出している。下部では中尊蓮台に沿うように龍の全身が彫られている。龍は口から蓮華を吐き、それが途中で分岐し、葉や蓮台になっている。菩薩はこの蓮台上に立っている。

4 龍興寺出土背屏式造像の特徴

以上が北魏から東魏にかけての背屏式造像の作例である。これをもとに、背屏式造像の特徴をまとめてみたい。

(1) 如来像

肉髻は北魏から東魏時代を通じて総じて高いが、東魏では肉髻が低いものもあり、東魏のなかでも年代が下がる作例と考えられる。頭髪については北魏では波状で表現されているのに対して、東魏では螺髪が一般的になっている。

着衣はいずれも漢民族式である。ただし着衣襞の表現についてはいくつかの種類が認められる。

B73号造像如来像(第5図1)は襞が突出したようになっている。ただし実際は平面を幅広く、なおかつ上部を鋭角に、下部を鈍角に彫ることで、彫り残した部分を突出したようにみせたものであり、浮彫りとは異なる。この種の襞の表現は北魏と考えられている⁶⁾。

B40号造像如来像(第5図2), B416号造像如来像(第5図3), B163号造像如来像(第5図5), 北朝105頁造像如来像(第5図6)は二重線で襷を表現したもので、北魏から東魏に作例がある。この種の襷は、二重線で囲まれた部分が突出した印象を与えるようになっており、その点では上記のB73号造像如来像の襷と同じ効果をもとめている。しかし彫りが浅いため、B73号造像如来像ほどは突出した印象はない。従ってこの種の二重線による襷表現は、B73号造像如来像の表現法の省略形と考えられる。

B76号造像如来像(第6図1), B7号造像如来像(第6図2), B7号造像如来像(第6図3), 芸術図24号造像如来像(第6図4)は襷が段状になるものである。この段は上部からの彫りを緩やかにし、下部の立ち上がりを急にすることで彫り出されている。このうちB76号造像如来像とB7号造像如来像は彫りが深いため、段も高く見える。

この他には単純な沈線で襷を表す芸術図17号造像如来像(第6図5), B384号造像如来像(第6図6)や襷を彫刻しないB164号造像如来像(第7図1), B190号造像如来像(第7図2)などがある。

袈裟端部は左手前腕で受けるのが一般的ではあるが、東魏時代には芸術33号造像如来像(第6図3), 芸術41号造像如来像(第7図2)のように上腕から前腕で受ける作例もある。

(2) 菩薩像

菩薩は宝冠をかぶるが、その種類は多様で、一般的な宝冠から、三山冠、円筒状の冠などがある。一般的な宝冠の例としては、B40号造像菩薩像(第8図2・3), 北朝105頁造像左菩薩像(第9図4), B348号造像右菩薩像(第11図1), B190号造像左菩薩像(第11図6)がある。このなかでB40号造像は冠帯があるものの冠繪がない作例である。これに対して他の菩薩像には冠帯に冠繪が付いている。三山冠の作例としてはB416号造像左菩薩像(第8図5), 芸術図24号造像右菩薩像(第10図3)がある。後者には布状の装飾が付いている。円筒状の宝冠の例としては、B163号造像左菩薩像(第9図2), B76号造像菩薩像(第9図5・6), 図37造像菩薩像(第9図7・8), B70号造像右菩薩像(第10図1), 芸術図24号造像左菩薩像(第10図4), B164号造像左菩薩(第11図4)などがある。このうちB76号造像菩薩像, B70号造像右菩薩像の円筒状冠は冠帯・冠繪以外はほとんど装飾がないが、他の冠には何らか

の装飾が付いている。

上半身には胸飾をつける例が多い。肩飾については、B73号造像菩薩像（第8図1）、B40号造像菩薩像（第8図2・3）、B21号造像菩薩像（第8図6・7）のような北魏の造像はほとんど見られない。東魏では芸術図24号造像（第10図4）にのみ肩飾がなく、他の菩薩には肩飾がある。着衣では僧祇支を付けるものがあるが、北朝105頁造像右菩薩（第9図3）、B76号造像菩薩像（第9図5・6）、B7号造像菩薩像（第9図7・8）、芸術図17号造像菩薩像（第10図5・6）、B384号造像右菩薩像（第11図1・2）、芸術41号造像菩薩像（第11図5・6）といったように東魏に集中している。

また菩薩は例外なく天衣をつけている。形式としては天衣を交差させる像と肩から垂下させる像に分けられる。さらに前者には膝付近で交差する像、腰部で環をくぐらせて交差させる像がある。膝付近で交差させる像は、B73号造像菩薩像（第8図1）、B40号造像菩薩像（第8図2・3）、B416号造像右菩薩像（第8図4）、北朝105頁造像（第9図3）、B76号造像菩薩像（第9図5・6）、芸術図17号造像（第10図5・6）、B384号造像右菩薩像（第11図1）などがあり、北魏時代ではほとんどがこの形である。腰で交差させる作例としては、B21号造像左菩薩像（第8図7）、B163号造像菩薩像（第9図1・2）、B7号造像菩薩像（第9図7・8）、B70号造像菩薩像（第10図1・2）、芸術図24号造像左菩薩像（第10図4）、B384号造像左菩薩像（第11図2）B164号造像菩薩像（第11図3・4）があり、このうちB163号造像菩薩像、B7号造像菩薩像、B70号造像菩薩像、芸術図24号造像左菩薩像は瓔珞と組み合わせられている。

天衣を肩から垂下させる像のほとんどは、肩からそのまま天衣をおろす。作例としては、青州105頁造像左菩薩像（第9図4）、芸術図17号造像右菩薩像（第10図5）、B190号造像菩薩像（第11図5・6）などがある。例外的な作例として、芸術図24号造像右菩薩像（第10図3）のように、天衣を身体前面から背中に回す複雑なものがある。

天衣には、北魏では瓔珞などの飾りがないものが主だが、東魏になると瓔珞を付加するもの、天衣を垂下させるものなどが現れ、表現形式が多様になる、といった変化が認められる。

裙は縦方向の襷が付き、腰紐で縛る形式が北魏・東魏を問わず一般的である。ただし東魏時代には、前であわせ、襷が同心円状に表現される芸術図17号造像

右菩薩像（第10図5）、B190造像菩薩像（第11図5・6）のような作例も、少数だけ見られる。

（3）光背

光背には上部と下部に彫刻が施される。

上部では、頂部には龍・化仏または仏塔が彫られ、その下には外周に沿って飛天が彫刻される。北魏では、B416号造像（第1図3）やB21号造像（第1図4）のように頂部には龍または龍と化仏、外周には供養飛天が彫刻されている。それに対して東魏では北朝105頁造像（第2図2）、B70号造像（第3図1）、芸術図17号造像（第3図3）、B164号造像（第4図1）、B190号造像（第4図1）のように仏塔と伎楽天が彫刻される。このうち仏塔は、大部分は角を正面に向けるが、B70号造像のみは、塔側面を正面にしている。

下部は菩薩が立つ蓮台に関連して、彫刻が施される。北魏ではB40号造像（第1図2）のように、菩薩の蓮台は中尊の蓮台から伸びた茎で結ばれるか、B416号造像のように、如来蓮台から付いた龍頭の口から伸びた茎で結ばれている。しかし東魏になると、中尊蓮台に沿うように龍の全身像が彫刻され、その龍の口から蓮華が伸び、その先端の蓮台に菩薩が立つようになる（第2・3・4図）。

光背については、北魏時代は一般に素朴で簡素な彫刻がおこなわれるが、東魏時代には装飾性が増して、複雑な彫刻がおこなわれるようになる。

5 おわりに

以上、龍興寺出土の北魏から東魏の背屏式造像を概観し、青州市博物館の成果に若干の私見を加えて、その特徴をまとめてきた。最後に背屏式造像における、北魏から東魏への移行について触れてみたい。

まず北魏から東魏にかけての背屏式造像には、大きな様式的な断絶がなく、連続することが指摘できる。具体的には、如来像が漢民族衣着をまとうこと、菩薩像では天衣を交差させる像容を基本とすること、などを根拠とすることができる。

この様式的な連続の上に、細部形式の変化が認められる。

如来像に関しては、北魏まではほとんどない螺髪が、東魏になると一般的に

なることがあげられる。また着衣衣文の表現が簡略化し、はなはだしき場合には省略されるのも東魏の特徴である。またわずか一例ではあるが、肉髻が低くなる作例が現れることは、次の北齊時代への変化の先駆けとして注目される。

菩薩に関しては北魏に比べて、像容が多様になってくる。一つは装飾性に富んだ菩薩の出現であり、天衣に瓔珞をかさね、さらには宝冠や胸飾にも装飾を加える、といった「飾られる菩薩」がある。その反面、上半身を天衣で隠さず、瓔珞などもつけない、「飾られない菩薩」も見られる。また北魏ではほぼ全ての造像に見られた交差する天衣も、東魏ではまとわない作例が見られるようになっていく。

光背については上半部では北魏の龍・飛天から、東魏の仏塔・伎楽天への変化がみられる。また下部では、東魏になると菩薩の蓮台が全身を彫った龍から出るようになり、装飾性が高まっている。

全体として、北魏から東魏へと装飾性が増えており、安定した様式的な発展がみられる。同時に、東魏に入ってから菩薩の多様化、特に飾られる菩薩と飾られない菩薩の分化は、次の北齊時代にも連続する要素であり、また如来の着衣表現の簡略化、低い肉髻の出現なども、北齊へと受け継がれ、発展する要素である。

冒頭でも触れたように、北齊にはいると、背屏式造像は残るものの、丸彫りの単独像が中心となり、龍興寺の窖藏出土の造像には様式的に大きな変化があらわれる。その反面、上記のように連続する要素も確認できるのである。このような東魏から北齊への変化をどう考えるかが、今後の課題となる⁷⁾。

- 1) 夏名采・王瑞霞 「青州龍興寺出土背屏式仏教石像分期初探」(『文物』2000年第5期)
 - 2) 上記注1文献参照
 - 3) 王瑞霞「青州龍興寺佛教造像分期」(中国世紀壇芸術館・青州市博物館『青州北朝佛教造像』所収 2002年 北京出版社 北京)
 - 4) 主な図録として以下のものがある
 - (a) 中国歴史博物館・北京華觀芸術品有限公司・山東青州市博物館『山東青州龍興寺出土佛教石刻造像精品』(1999年 北京)
 - (b) 青州市博物館『青州龍興寺佛教造像芸術』(1999年 山東美術出版社 済南)
 - (c) 香港芸術館『山東青州龍興寺出土佛教造像展』(2001年 香港)
 - (d) 中国世紀壇芸術館・青州市博物館『青州北朝佛教造像』(2002年 北京出版社 北京)
- なお(c)の編者には青州市博物館の名前がないが、この展覧会の共催者に青州市博物館の名称があり、図録の編集委員に夏名采・王瑞霞の名前が見えており、青州市博物館が関

係したことは間違えないと考えられる。

- 5) 本稿取り上げる背屏式造像は全体像がある程度判断できるものであり、断片的な造像は対象としない。
- 6) 作例として山東省博物館の所蔵される正光6年銘をもつ張宝珠造像がある。
- 7) 松原三郎氏は、河南省の東魏時代造像を検討し、そこに北齊時代への過渡的な要素があることを、指摘したことがある。

松原三郎「東魏石彫論」(同氏著『中国仏教彫刻史論』1995年 吉川弘文館 東京所収)
また筆者も龍興寺窖蔵出土の北齊時代如来造像の検討から、東魏から北齊への連続性を指摘した。

小澤正人「山東龍興寺窖蔵出土北齊時代如来立像の一考察」(『成城文芸』198号 2007年)

図版出典目録(出典の略号は第1表参照)

- 第1図1 第5図1 第8図1:『芸術』図10
第1図2 第5図2 第8図2・3:『芸術』図11
第1図3 第5図3 第8図4・5:『芸術』図14
第1図4 第5図4 第8図6・7:『芸術』図9
第2図1 第5図5 第9図1・2:『精品』65頁
第2図2 第5図6 第9図3・4:『北朝』105頁
第2図3 第6図1 第9図5・6:『芸術』図19
第2図4 第6図2 第9図7・8:『芸術』図37
第3図1 第6図3 第9図1・2:『芸術』図33
第3図2 第6図4 第10図3・4:『芸術』図24
第3図3 第6図5 第10図5・6:『芸術』図17
第3図4 第6図6 第11図1・2:『芸術』図18
第4図1:『中国国宝展図録』(東京国立博物館,朝日新聞社編2004)97
第7図1 第11図3・4:『芸術』図35
第4図2 第7図2 第11図5・6:『芸術』図41

付記:本稿は平成19~21年度基盤研究(C)「中国隋初期仏教美術様式,形式という新概念の成立」(研究代表者:筑波大学 大学院人間総合科学研究科 准教授八木春生)による研究成果の一部である。

龍興寺窖藏出土背屏式造像



1 B73号造像



2 B40号造像



3 B416号造像



4 B21号造像(太昌元年532年)

第1图 龍興寺出土背屏式造像(1)



1 B163号造像



2 北朝 105 頁造像



3 B76号造像



4 B7号造像

第2図 龍興寺窖藏出土背屏式造像(2)

龍興寺窖藏出土背屏式造像



1 B 70 号造像 (天平 3 年 536 年)



2 芸術図 24 号造像



3 芸術図 17 号造像



4 B 384 号造像

第 3 图 龍興寺窖藏出土背屏式造像 (3)



1 B 164号造像



2 B 190号造像

第4図 龍興寺窖藏出土背屏式造像(4)

龍興寺窖藏出土背屏式造像



1 B 73 号造像



2 B 40 号造像



3 B 416 号造像



4 B 21 号造像



5 B 163 号造像



6 北朝 105 頁造像

第 5 图 如来造像 (1)



1 B76号造像



2 B7号造像



3 B70号造像



4 芸術図 24号造像



5 芸術図 17号造像



6 B384号造像

第6図 如来造像(2)

龍興寺窖藏出土背屏式造像



1 B164号造像



2 B190号造像

第7图 如来造像(3)



1 B73号右脇侍菩薩



2 B40号右脇侍菩薩



3 B40号左脇侍菩薩



4 B416号右脇侍菩薩



5 B416号左脇侍菩薩



6 B21号右脇侍菩薩



7 B21号右脇侍菩薩

第8図 菩薩造像(1)

龍興寺窖藏出土背屏式造像



1 B 163 号右脇侍菩薩 2 B 163 号左脇侍菩薩 3 青州北朝 105 頁右脇侍菩薩 4 北朝 105 頁左脇侍菩薩



5 B 76 号右脇侍菩薩 6 B 76 号右脇侍菩薩 7 B 7 号右脇侍菩薩 8 B 7 号造右脇侍菩薩

第 9 图 菩薩造像 (2)

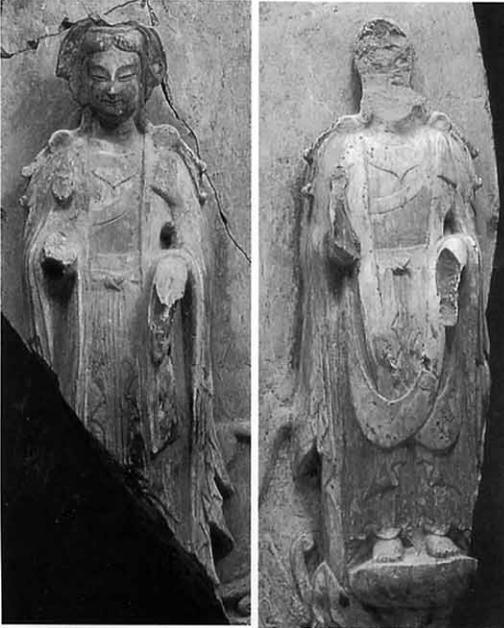


1 B 70号右脇侍菩薩

2 B 70号左脇侍菩薩

3 芸術図 24号右脇侍菩薩

4 芸術図 24号左脇侍菩薩



5 芸術図 17号右脇侍菩薩

6 芸術図 17号左脇侍菩薩

第10図 菩薩造像(3)

龍興寺窖藏出土背屏式造像



1 B 384 号右脇侍菩薩



2 B 384 号左脇侍菩薩



3 B 164 号右脇侍菩薩



4 B 164 号左脇侍菩薩



5 B 190 号右脇侍菩薩



6 B 190 号右脇侍菩薩

第 11 图 菩薩造像 (4)